

各関係機関団体の長 }
各病虫害防除員 } 殿

福岡県農林業総合試験場長
(福岡県病虫害防除所)

令和 5 年度病虫害発生予察特殊報第 3 号について

このことについて、下記のとおり発表したので送付します。

特殊報第 3 号

1 害虫名 トマト立枯病

2 病原菌 *Fusarium solani-melongenae*(*Haematonectria ipomoeae*)

3 発生作物 トマト

4 発生の経過と概要

令和 5 年 4 月、県内の施設トマトほ場で、上位葉が黄化および萎縮し、地際部に褐変症状を呈する株が確認された。地際部の褐変した茎表面には赤橙色の小粒が形成されていた。

病徴部から *Fusarium solani* が分離され、門司植物防疫所に同定を依頼したところ、*Fusarium solani-melongenae* (*Haematonectria ipomoeae*) によるトマト立枯病と確定された。

5 国内での発生状況

平成 2 年に愛知県で初めて確認された後、宮崎県、広島県、三重県、岐阜県、佐賀県で発生が報告されている。

本病菌は、トマト以外にナスやピーマン等で立枯症状を引き起こすことが知られている。

6 病徴

葉の黄化や萎れが発生し(図 1)、最終的に枯死する。株の地際部には、褐変やひび割れが認められ(図 2)、茎の内部は黒褐色に腐敗する。株の地際部や露出根部の罹病部表面に赤橙色の小粒(子のう殻)が形成される場合が多い(図 3)。

7 病原菌の形態

糸状菌の一種で子のう菌類に分類される。分生子は、楕円～紡錘形で無隔壁の小型分生子(図 4)と鎌形で隔壁を有する大型分生子を生じる。子のう殻は赤橙色で、子のう殻中に棍棒状の子のうを形成し、その内部に隔壁を有する子のう胞子を 8 個形成する(図 5)。

8 病原菌の性質

生育適温は 25～30℃で高温多湿条件を好むと考えられる。土壌中の罹病残渣に付着している病原菌が伝染源となり、発病後は形成された分生子や子のう胞子の飛散により、二次伝染が起こると考えられる。

9 防除対策

- (1) 令和5年8月現在、本病に対する登録農薬はないため、耕種的防除を行う。
- (2) 定植前に太陽熱利用等による土壌消毒を実施し、土壌中の病原菌密度を低下させる。
- (3) 罹病株は伝染源となる恐れがあるため、ほ場外へ持ち出し適切に処理する。
- (4) 過度なかん水は避けるとともに、ほ場内の排水対策を徹底する。



図1 上位葉の黄化および萎縮



図2 地際部の褐変



図3 地際部表面の子のう殻



図4 小型分生子

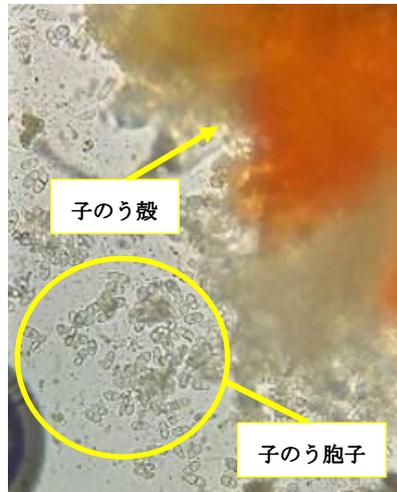


図5 子のう殻・子のう胞子

病虫害防除所のホームページでは、各種病虫害の発生状況を随時更新しています。

発生状況の把握や防除の参考にご活用下さい。

○福岡県病虫害防除所のホームページへのアクセス

URL: <http://www.jppn.ne.jp/fukuoka/> または右QRコード①



○X（旧Twitter）で定期情報や警報等発出のお知らせを始めました。
Twitterの本アカウント（福岡県農作物病虫害情報）へのアクセス

URL : https://twitter.com/PPDPO_Fukuoka または右 QR コード

